

株式会社 山本食品

代表取締役 山本豊氏



プロフィール

1962年三島市生まれ横浜山手学院高等部卒業後、中学時代からの米国行きを叶えたく渡米の条件としてされた山形県の老舗菓子店に2年間の丁稚修行終了後に念願の渡米、(LA Harbor College 中退)1986年に帰国後(株)山本食品に入社。1998年1月より代表取締役に就任。企業コンセプトは「わさびを、もっと、おもしろく。」

代々続く自由な発想とチャレンジ精神で三島を導く

伊豆の玄関口でわさび屋を営む山本食品の山本豊代表取締役に話を伺った。

——業務内容について教えてください。

弊社は明治38年創業のわさび漬け屋で、私で4代目になります。私の曾祖母は煮物が上手で、それを曾祖父が木の箱に入れて行商したのが商売の始まりです。戦後、祖父の代からわさびに特化するようになりまして。祖父はすでに逝去しているのですが、父はすでに逝去して

いるので定かではありませんが、戦時中、伊豆でわさびの仕事をしていた戦友と「無事に戻ったら一緒にわさびをやらう」と交した約束が、実現したと聞いています。

三島ブランドに認定された三島わさびの栽培

山本食品の歴史は長いですが、工場で作った商品を観光地へ卸していますので、三島市内で小売業としての商売はしていませんでした。昭和54年、NHKの大河ドラマ「草燃ゆる」の撮影が三島大社で行われ、観光客の乗ったバスで賑わっていました。それを見た当時の工場長が、「ついで来て下さい」という旗をオートバイに結わえ付け、バスのお客様をバスごと工場まで連れてきて、わさび漬けを販売しま

した。それが、現在行っている観光販売のはじまりで、観光を通してわさびを販売するビジネスモデルにつながっています。

その後バス会社と契約を結び、事業は拡大しました。観光や小売りの在り方が大きな変化を遂げる中で、観光販売を一つのチャンネルにしようかと判断した先代の父、芳二社長には、柔軟性と先見性があったと思います。

——わさびの栽培もしているのですか？

弊社で使用するわさびは、基本的に契約栽培で農家の方に作ってもらっています。そうした中、弊社で取り組んでいるのが、三島わさびの栽培です。

三島わさびとは、箱根西麓で作られた三島原産のわさびのことで、去年、三島ブランドに認定されました。わさびは通常、清流の中で育ち、根の部分収穫するのに対し、三島わさびは土の中に植えられる畑わさびで、茎と葉を収穫します。栽培をはじめ今年で4年目になりますが、次第に収穫量が増えています。

今、和食ブームもありわさびの需要は増えています。先日、パリで日本文化を紹介する機会があり、生わさびを紹介したところ、フランスでもわさびは知られて

いますが、本物は見たことがないようで、大変ご好評を頂きました。わさびは日本独自のハーブですから、海外に向けても正しく紹介していきたいと思っています。

先ほどの三島わさびを使って、今までなかったような加工品の開発にも取り組まれました。海外からお見えになるお客様も、お土産品としてお求めになりやすいように考えた、ご飯にもパンにもバスタにも合う、弊社の自信作です(中段写真)。

わさびを通じて大社周辺の観光振興に取り組み

わさびの栽培は今から400年前に静岡市の有東木で始まりました。徳川家康が絶賛した有東木のわさびは、門外不出のご法度品になったと伝えられています。また、伊豆地域は品質のよいわさびを作ることで有名で、品評会で上位を占めています。

わさびに係る様々な地域・団体・企業が、静岡のわさびを盛り上げるため、協力していくことができるといっています。——三島の環境や文化についてどのようにお考えですか？

三島は伊豆の玄関口にあるにも関わらず、通過点になっています。伊豆フルーツパークや三島スカイウォークなど新たな魅力ある観光スポットが生まれていますが、そこに来たお客様が箱根へ抜けてしま

ことが多いのが実情です。人の流れを市内に向かわせるためには、大型の駐車場が必要だと感じています。駐車場ができて観光客が増えれば、大社の周辺に自然と門前町が形成されてくると思います。

三島に店舗を持つのであれば、三島大社の前がいいと思っていました。三島大社は三島のランドマークで大切にしたい場所だからです。その大社の前に山本食品門前せせらぎ店をオープンさせたのは平成22年のことです。門前町が形成される礎となるようなお店にしたいと思いました。

店舗は、観光にいらしたお客様が休める場所にしたいと思い、開放感のあるテラスにこだわりました。通りの一角としてお客様にくつろいで頂けるようなイメージです。そしてトイレにもこだわりました。観光地で、トイレが汚いとがっかりしてしま



三島わさびを使った人気のオイルふりかけ

いますよね。ここは小さな店舗ですが、8つのトイレを備えています。三島にいらして頂いたお客様には、気持ちよく過ごして頂きたいと思っています。

併設されたころつけスタンドには「薬(ひこばえ)」と名付けました。「薬」とは樹木の切株から生えてくる若芽のことです。昔栄えた門前町は跡形もありませんが、そこにみんなで小さな「薬」を出せば、いづかまた森(門前町)に戻るとい願いを込めています。

私が三島でお勧めする場所は、この三島大社周辺です。三島大社を中心としたこのエリアが、これから絶対に伸びると確信しています。だからこそ微力ながらも力になりたいのです。

——文化を活かしたまちづくりについてのお考えをお聞かせください。

平成25年から門前にある大社の杜みしまで、町工場で生まれた様々な雑貨を販売する「鱈背家(いなせや)」という店舗を運営しています。町工場の高い技術を持つ職人の技を、お客様に直接届けたいという思いから始まりました。

町工場は、大手企業の下請けで製品を生産することが多く、企業間取引が主流です。一方私たちは、常にお客様から直接的な反応を頂くことができます。鱈背家のオープンの日、町工場の職人が、自分で考えて作った商品を、お客様

が買って行かれる姿を見て、感動のあまり涙を流していました。わさびを通じて作りたいものを作り、それを買ってくださるお客様がいる。この仕事のありがたさを改めて痛感しました。異業種との交流から多くのことを学び、自分自身を見つめ直す貴重な経験をすることができました。

——今後の三島に期待することをお聞かせください。

三島に期待することは、観光都市として大きくなることです。バス旅行のお客様が、あまりよく知らずに三島にいらしたとしても、それがきっかけとなり、三島を好きになって頂ければよいと思います。三島といったら「コレ」という印象を持って頂けるような仕事をこれからもしていきたいです。そしてますます本気で三島大社とその周辺を盛り上げていきたいと思っています。



山本食品

静岡県三島市御園103-2

<http://www.yamamotofoods.co.jp/>

「三島企業の考える三島カルチャー」は、「三島の文化応援プロジェクト」が、三島周辺に拠点を置く企業の方々、三島の文化についてインタビューするシリーズ企画です。配布場所/生涯学習センター、三島市民文化会館、市内文化施設等、詳しくは下記のWebサイトをご覧ください。

次回「仲東測量設計株式会社 取締役会長 中江喜喜さん(予定)」